

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19530843
 研究課題名（和文） 内容の屈折と論理の一貫：韓国の社会系教科におけるナショナリズム教育
 研究課題名（英文） Warped Content and Consistent Logic : Education for Formation of Nationalism in Korea
 研究代表者
 権 五定 (KWON O-JUNG)
 龍谷大学・国際文化学部・教授
 研究者番号：30288641

研究成果の概要：韓国のナショナリズム教育は、飛躍・転化・dogmatic な indoctrination の方法でナショナリズムを信仰化していく過程をたどってきた。信仰化したナショナリズムは「閉ざされた形式」(聖域論理・方法)となり、すべての批判を拒む。ナショナリズム教育の論理は主導勢力が変わっても一貫している。一方、ナショナリズム教育の内容は、主導勢力（政権・非政権パワー集団）が設定する、相剋パワー集団が変われば屈折的に変幻する。そこに相剋ナショナリズムが生まれる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：ナショナリズム教育 屈折ナショナリズムの教育 相剋ナショナリズムの教育

1. 研究開始当初の背景

科学研究費補助による平成 11～12 年度研究「韓国社会科における日本学習の内容と授業構成の論理」と平成 15～16 年度の研究「韓国における日本の歴史教科書批判の構造とその変化」などの研究によって日韓間の教育問題（歴史教育、歴史認識）をめぐる摩擦の根底に教育的ナショナリズム、あるいはナショナリズム教育の存在を確認し、韓国におけるナショナリズム教育の本質を明らかにし

たかった。

特に、韓国において最も徹底的にナショナリズム教育が行われていた軍事政権時代（1960年代-1980年代）に教育を受けた世代が社会、教育の現場で活動を始める 1990 年代以後のナショナリズム教育の変化に研究者としての興味がわいてきた。この世代が受けたナショナリズム教育（主として「反共」教育）がそのまま受け継がれていくか、軍事政権に反対し民主化運動を繰り広げてきた革新勢力と言われるこの世代はナショナリ

ズム教育を止め、グローバルな視点から事実認識教育を重視していくかを見極めたかったのである。

2. 研究の目的

韓国の社会系教科におけるナショナリズム教育の特殊な構造や性格を明らかにしていくために、具体的に次のような研究目的を設定した。

(1) 韓国において、近代教育が始まって以来現在に至るまで、学校教育を通してナショナリズム教育がいかに行われたかを検討し、そこに見られる内容、方法(論理)の変化を明らかにする。

(2) 「国籍ある教育」を最も強化していたと見られる軍事政権下のナショナリズム教育を教育政策・教育課程及び教科書・教育実践のレベルで検討し、そこに見られるナショナリズム教育の構造や論理を明らかにする。特に、この時期のナショナリズムの input 過程に注目したい。

(3) 軍事政権以後、ナショナリズム教育がいかに変化・屈折ナショナリズムに output していったかを明らかにすると同時に、その変化・屈折の中に韓国のナショナリズム教育の特徴は見られないか、軍事政権時代のナショナリズム教育と同質の特徴が温存されているとしたらその理由は何であるかを探る。

韓国におけるナショナリズム教育の「特殊性」を明らかにすることによって、その「特殊性」の中からナショナリズム教育の本質「普遍性」の一端を見いだすことができるのではないかと望んでいる。また、実践的レベルにおいては、本研究の結果、韓国における反日的ナショナリズム、あるいは日韓両国における歴史認識のずれを見る視野が広がることを期待している。最終的には、ナショナリズム教育の課題や限界を踏まえ、国際化時代における社会科(歴史・地理・公民・倫理)教育 市民教育のあり方を模索する一踏台を提供したい。

3. 研究の方法

(1) 韓国におけるナショナリズム教育を、朝鮮末期のナショナリズム教育
植民地時代のナショナリズム教育
独立後のナショナリズム教育
軍事政権時代のナショナリズム教育
軍事政権後のナショナリズム教育

などの順に、全体的流れを整理し、そこに見られるこの教育の内容的、方法(論理)的「特殊性」を見いだす。ここで見出された「特殊性」は仮説的性格を有し、次の段階で検証する。

この部分は、すでに行われてきた「教育問題をめぐる国際摩擦」と併行していく予定であり、進んでいる個所もある。

(2) 軍事政権下で行われていたナショナリズム教育を、

教育政策(例えば、「国民教育憲章」の制定過程と教育実践への影響)

教育課程・教科書(第3次～第5次教育課程の社会科、道徳・国民倫理、国史の強化目標と内容及び各教科の教科書の内容)

教育実践(初・中・高の社会科、道徳・国民倫理、国史及び大学の国民倫理、国史授業の実践記録や授業内容のノートなど)

のレベルに分けて、それぞれの資料を収集し、整理、分析する。特に、この時期のナショナリズムの input 過程(実践)に力点を置いて調査、分析をおこなう。

(3) 軍事政権後のナショナリズム教育を上(2)と同じ方法で調査、分析するが、次の2点異なる作業を加える。

教育政策、教育課程の変化内容を検討する。

教育現場の変化(例えば、“全国教員労働組合”の組織)に伴って、新しい枠組みのナショナリズム教育が行われていることに注目し、その内容と方法を重点的に吟味する。

(4) 上の教育過程で得られた資料(特に軍事政権時代とその後の実践)は次のような基準に基づいて類型化することによって韓国におけるナショナリズム教育の構造や性格の明瞭化を試みる。

		基準	
		内容の選定	
基準	説明 (explanation)	第3者 (meta)視 点の容認	第3者視 点の不容 認
		方法	物語 (narrative)
		C	D

4. 研究成果

近代学校教育が始まって以来、韓国におけるナショナリズム教育は一貫して相剋構造を持ち続けてきた。相剋するナショナリズムの教育が最も顕著に現われるのは植民地時代である。日本のナショナリズムによる皇国臣民化教育が行われる一方、それに対抗して朝鮮の指導者及び西洋宣教師による啓蒙的ナショナリズム教育が行われていたのである。

植民地時代以外にも、対外的に、日本・西洋列強の帝国主義勢力、ソ連・中国（中共）・北韓（北朝鮮）などの共産主義勢力に対する相剋ナショナリズム教育が行われただけでなく、対内的に、路線を異にする他集団や勢力を相剋するものと見做し、ナショナリズムの名の下、排除を促す教育が行われてきた。その結果、民族同士、国民同士の間に異なる理念や内容のナショナリズムが衝突する現象が起こる。

相剋ナショナリズム教育が行われる過程で、必然的にナショナリズムの武器化が必要となり、ナショナリズムの信仰化を図る。信仰化したナショナリズムは最高、絶対の価値として君臨し、すべての批判を拒んだ。しかし、ナショナリズム教育の複数の主導勢力（独立直後登場する性向の異なるナショナリスト達、1980年代の軍部勢力と民主化運動勢力など）によってそれぞれ違った教育内容や方向が決まり、ナショナリズムの細分化が進んだ。複数の主導勢力によるナショナリズムの細分化は、当然ナショナリズムの道具化を伴う。教育の主導勢力によって、ナショナリズムの教育内容は「反共」にもなり「容共」にもなる。「反日」から「反共」へと重点が移動することもあれば「反共」より「反米」がもっと強く打ち出されることもある。必要に応じて韓国のナショナリズム教育の内容は屈折、変幻してきたのである。

韓国におけるナショナリズム教育が最も組織的に、徹底的に行われたのは軍事政権時代（特に、1960～1970年代）である。教育の基本方針は終始「国籍ある教育」であり続け、「国民教育憲章」を制定して「国民形成」のために徹底したナショナリズム教育を行っていたのである。国史教育を強化し、反共道徳・国民倫理教科を新設してイデオロギーとしてのナショナリズムを注入した。

ナショナリズム教育は近代化運動と結びつき、ナショナリズム教育を通して培われた愛国、忠誠は開発独裁を正当化する道具となって行った。すでに信仰化していたナショナルイズムを道具化して独裁政権への批判を阻止していたのである。ナショナリズム教育が

愛国・忠誠心を形成し、それが独裁権力の正当化に繋がるという政治的信念がナショナリズム教育を強化し続けるエネルギーであった。ナショナリズム教育は、形式的図式に乗って行われていたのである。

軍事政権下のナショナリズム教育は刺激的なインドクトリネーション、論理の飛躍・転化の実践過程を繰り返していた。カリキュラムの中には学問中心主義の論理とナショナリズム教育の要素が同居していた整合性に欠けた構造が現われており、社会科学の概念のみの内容構成に徹して問題と矛盾に満ちた現実の社会を糊塗していた。また、事実関係の科学的探究が情緒的愛国・忠誠へ飛躍・転化するといったアイロニーも見られた。

持続の中の変化、変化の中の持続といったダイナミックな社会、歴史認識の視点は退け、固定したドグマチックな社会、歴史認識を強いるナショナリズム教育は、結局、権力への忠誠を促すものとなっていった。事実を糊塗する、ある事実から目的（愛国、忠誠）へと飛躍・転化する、ドグマチックな認識を強いる...ナショナリズムの教育によってすべての子どもが一つの思考圏に縛られていくと考えられていた。

様々な変形も結局信仰化したナショナリズムのインドクトリネーションに合流する軍事政権下のナショナリズム教育は、複数の教育主導勢力・教育観を認めなかった。しかし、1980年代以後軍事独裁に反対する民主化運動勢力が成長することによって、ナショナリズム教育の相剋構造が復活した。

1990年代後半から、民主化運動勢力は「386世代」とか「革新勢力」と呼ばれ、社会・政治・教育の現場で活躍するようになる。この勢力は軍事政権下で徹底したナショナリズム教育（特に反共教育）を受けていて、軍事政権下のナショナリズム教育の論理や内容を受け継ぐか、反軍事政権的思考で、ナショナリズム教育を全面的に否定する傾向を帯びると考えられた。しかし、この勢力は、まず以前のどの勢力よりもナショナリズム教育を強く支持あるいは実践している（全国教員労働組合、社会科教師の集いなど）。また、この勢力が企画した授業を分析してみると、内容選定において「第三者視点」を拒み、方法においては客観的な説明より「主観的物語」に傾き（研究方法4の図のD）程度の差はあるものの、飛躍・転化・ドグマの論理が見られる。教育の内容では、「反共」は姿を消し、反日、反保守とつながる「反親日」、反米的な「反国際化」が目立つ。「革新勢力」のナショナリズム教育の内容は、軍事政権時代のナショナリズム教育の内容が屈折的に変化したものなのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

権五定、「内容の屈折と論理の一貫：韓国
の社会系教科におけるナショナリズム教育」、
全国社会科教育学会『社会科研究』
第72号、2010.3、掲載確定、査読有

[学会発表](計2件)

権五定、「韓国の軍事政権下(1960年～
1980年代)におけるナショナリズム教育
とその後の変化」、
龍谷大学アフラシア平和開発センター研
究会、2008.11.21、龍谷大学

権五定、「人間形成の論理とナショナリズ
ムの論理」、
韓国社会教科教育学会全国大会基調講演、
2008.1.16、韓国教員大学

[図書](計2件)

権五定、ミネルヴァ書房、「日韓間の教育
問題をめぐる紛争と和解克復の可能性」、
長崎暢子・清水耕介編 『紛争解決：暴
力と非暴力』(アフラシア叢書第1巻)、
2010年、印刷中

権五定・長崎暢子・山川貴美代共編、龍
谷大学アフラシア平和開発センター、「東
アジアにおける近・現代史教育 学校教
育は和平構築に貢献してきたか」、2009
年、印刷中

6. 研究組織

(1) 研究代表者

権 五定 (KWON O-JUNG)
龍谷大学・国際文化学部・教授
研究者番号：30288641

(2) 研究協力者

イ トンウォン (仁川教育大学)
チョイ ヨンキュウ (韓国教員大学)
クォン オヒョン (慶尚大学)
キム ヨンソク (慶尚大学)
チョン ホボン (晋州教育大学)
パク ヨンジョ (晋州教育大学)